氏 名	丸島　令子

（論文内容の要旨）

本研究は，中年期成人特有の心理社会的課題と人格的個人差の両面を検討することを目的としている。

中年期に対して　Erikson,EH　(1950,1963,1982)は　「generativity vs. stagnation 世代性/停滞」を提唱し，成人の発達研究に多大な影響を与えた。今日，Erikson の世代性概念は，個の実現における自我同一性（identity）と世代連関的な相互性(mutuality)との二側面は重視されながらも，より整合性を持った概念再検討がなされている。 McAdams & de St.Aubin (1992)は「世代性の７つの心理社会的要素の全体図」を示し，世代性の多元的な意味内容を持つ要素とそれらすべての要素間の関連性を検証して,世代性概念を再構築し,新たな実証研究の方向づけをした。

本研究では，McAdams & de St.Aubin の基幹構想概念から，各々の成人が「個の実現 agency」と「必要とされることを必要とする communion」という,「個体性」と「関係性」の２つの希求性を柱とし，同時に成人への役割期待の要請が動機付けとなって,次世代のために世代性の「関心」を喚起させ,関心は「行動」に移され，世代性を実現するという連関過程の検討がなされた。そこには,世代性の多次元的な意味内容として，①創造性，②世話、③世代継承性が抽出されるとの想定のもと，仮説構成概念が組み立てられた。

最初の調査研究においては，Erikson 理論の「世代性/停滞」の状況についての基礎的なデータが，対照群(精神科通院群)も含めて求められた。次に，世代性の多元的な仮説構成概念に基いた世代性の「関心」と「行動」の尺度の作成が試みられた。結果は，世代性の発達は，若い成人＜中年群＜高齢群の順に加齢により高まることが示され，Erikson が中年期をピークとするとした見解は端的には支持されないとの近年の内外の研究と一致した。また世代性の発達は成人の人格のあり方を示す自己概念と関連していることが明らかにされた。一般成人の中年群には精神健康上の「リスク群」がかなり存在した。彼らは「精神科通院群」とすべての得点で類似した性向を示し,世代性の発達においては人格構造の諸要素が健康群と比べてバランスのとれた影響要因となっていなかった。したがって，彼らには「世代性/停滞」の様相が認められたのであるが，しかし,個々の成人のネガティブ・ライフイベントの体験と「中年期の危機」との関連は認められなかった。

上記の結果から，「日本版世代性関心尺度：GCS」と「日本版世代性行動チェックリスト：GBC」が作成された。「個体性」と「関係性」の希求性と,成人に対する役割期待をめぐる項目構成により「関心」と「行動」の連関について検討し,両尺度に共通する３つの因子（創造性，世話，世代継承性）が抽出された。しかし信頼性と妥当性に問題が残ったために，再度，「改訂版世代性関心尺度：GCS-R（20項目）」と「改訂版世代性行動チェックリスト：GBC-R（23項目）」

を作成した（対象者は25-75歳男女，996名）。両尺度は先の尺度と同様の３因子構造を成し,満足しうる信頼性と妥当性を得た。

この尺度は，先行の研究結果の「世代性の発達は中年期がピークとは限らない」という認識から,「親であること」を第一義的前提とすることを離れて，性と年齢を制御変数として，偏らない成人の世代性の個人差が測定できるものとなった。また，内面的な「個体性」と外向きの「関連性」の希求性を次世代への関心と行動の中に調和させ，そこに自己のあり方を関与させて，社会的な要請にも応えることができる，成熟した成人の様相を捉え得る尺度となった。

今後の課題として、Kotre(1984)の指摘した世代性の暗部，あるいは,Eriksonの示唆した弊害的な「相互性」についての測定方法の検討が残された。

氏 名	丸島　令子

（論文審査の結果の要旨）

本論文は，中年期成人の重要な心理社会的課題である「世代性generativity」についての人格的個人差に関する研究である。　世代性とは，Erikson,EH　によって，停滞の対極にある徳目として，中年期心性の中心に位置づけられた概念である。次世代への継承についてさまざまな次元の課題を抱えているものであり，多様性を含んだこの概念の構成要素を捉えるという困難な基礎調査がなされたところに，本研究の意義を認めることができる。

まず，本研究においては,Erikson の概念を基盤にしつつ,数量化しうる概念構成をめざして，McAdams　& de St. Aubin　が提示した「世代性の：７つの心理社会的要素の全体図」を中心に据えて，Jung の個性化論，Levinson の中年期研究,Bradley & Marcia による中年期という世代性地位の研究，また，生涯発達研究の立場からライフコース論を提唱したVaillantや近年のStewartらによる多次元・多要因的な中年期理解，さらに，精神医学や臨床心理学における中年危機論など，多様な側面から広く中年期の世代性研究が検討された。これらの先行研究を踏まえて，以下の３つの調査研究がされた。

研究 1a の調査では，一般成人 390 人と患者 41 人を対象に，①中年期の自己概念の因子構造　②中年期の発達課題としての世代性の検討，③世代性の対極の停滞についての患者群と一般成人群の比較，がなされた。その結果，中年期の自己概念として，達成・適応・社会性の３因子構造が抽出された。世代性については，中年群より高齢群に高いこと，また，一般成人群の方が患者群より高いことが示された。研究 1b では，ネガティブ・ライフイベントの心理的適応への影響について調査され,個人のネガティブ・ライフイベントの有無と中年期危機とは関連しないことが確認された。これらの研究から，ライフイベントを受け取る際の個人のあり方の重要性が明らかにされた。

次いで，研究２では，研究１の基礎データを踏まえ，McAdams らによる「全体図」をもとに，「個の実現」と「関係性の実現」という２つの希求性が，次世代のための世代性の「関心」を喚起させ，それが「行動」に移されるという連関過程を生み出し，そこには，①創造性，②世話，③世代継承性の３つの要因があるとの仮説構成概念が組み立てられた。この仮説構成概念に基き，世代性の「関心」と「行動」の尺度の作成が，McAdamsの「世代性関心尺度(LGS)」を翻訳した「日本版世代性関心尺度」と，著者が独自に作成した「日本版世代性行動チェックリスト」によって行われた。分析対象者は，前者では成人 167 人，後者では成人 156 人で実施したが，信頼性係数が十分でない等の不備が見られたので，研究３において，新たに996人の成人男女を対象とする調査が実施された。その結果，仮説構成概念どおりの３因子を抽出し，内的整合性をもつ「改訂版世代性関心尺度」及び「改訂版世代性行動チェックリスト」が完成された。なお，質問紙調査では掬い取れないものについては，研究２において，

文章完成法を用いた「ナレーション」の調査がなされており，「関心」と「行動」は「ナレーション」における成人のライフイベントや個人の自己のあり方と関連していることと同時に，世代性の暗部についての注目の必要性が明らかにされた。

以上，本研究の成果は，多様な次元を含む概念を捉えるという困難な調査がなされ，性と年齢に偏らない成人の「世代性」の個人差を測定する尺度が提示されたことである。本研究が提示した尺度は，世代性について熟考する重要な手がかりを与えるものとなったと考えられる。しかし，この概念を捉える根本的な基盤となっているErikssonやJungの理論について文献の読み込みや，人格とのかかわりという見方における関係性や力動性に対する視点の不十分さが指摘された。また，世代性の暗部として，その継承が真の超越性との出会いを難しくすることについての検討，Erikson の generativity は不妊治療にも見られるようなまさに「生殖性」という今日的課題と深くつながるものとして改めて捉えなおす必要性があることなどが議論された。しかし，それは，著者も認識されている点であり，博士論文としての価値を損なうものではないと考えられた。

よって，本論文は，博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また，平成 20 年 3 月 27 日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。